日記 上

農商務省圖書
第 號 共 冊

太政官文庫
和書門
一一三五四號
二一函
八架
二冊

393
内閣文庫
和書類
一一三五四號
二冊
一七八函
一四架

内閣文庫		
番號	和	11354
冊數		2 (1)
函號	178	393

風
上

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

茶溪鈴木先生著
多氣志樓主人註

唐太日記

全二冊

橋本玉蘭翁畫

文苑閣藏板

唐太日記例言

此日記は人に見すへき物にもあらす唯余か五百里外に
跋渉し経歴しける其書せる情状を有のまゝに記し置て
児孫に志あるものゝ為にのみ写置る一句ことに其の難き
をしらせてる珠玉よりも貴くし児孫に迄して其書を
読て自我しれし文を其見て孫に志あらは家職とする事
此は余か此書をしるし置
且蝦夷文字無し土地名称其まゝ記録に其名称
の其間にありて其人に尋て問しかはさらに聞あり
地名の考據をあけ例のこと

里程の如きも又定まる事能はず夷人の紀行と経歴の
一定せざるとともにその路のことなれり故に従道宿情の附するをもて
遠近を思ひ遠くへすることもあまた有り他の行を以て通し
若くは甲寅年唐太島志を以て参考し西宮下るを以て
行ふ事を当らしめ候
此書は菜溪先生甲寅の歳舎長のお供にて嗟峨
連島より千役せらるクシユンコタンといへる運上屋元よりシユ
シユヤ越といふ所より山程闊闢して本和人の未だ通ざりし
ところなるを山中践踏破して東満なるナイブツといへる

出夫より奥トッソの境を探りマーヌイといへる所にて西満へ
越夫よりシラヌシといへるソウヤへ乃渡海場へ帰らせ渡海
の風を待の間に十余日の筆記中より出要要抜萃して
蓋帆を彼地へ出発の御所置子よりく舟をさしむける人を
なみまし手に此方まし一些人ゝ便なるを専れりし此
余が此度随うて見さる所を以て従訳の折に加へ御覧なるの
欠伸を慰めまく図画を入れて梓に附せんとはからふとの
伊勢社國なる
松浦竹四郎源弘
安政四丁巳の獵月中旬第餘の偶居にてしるすは

甲寅 唐太日記巻の上

多氣志郎　松浦弘　評注

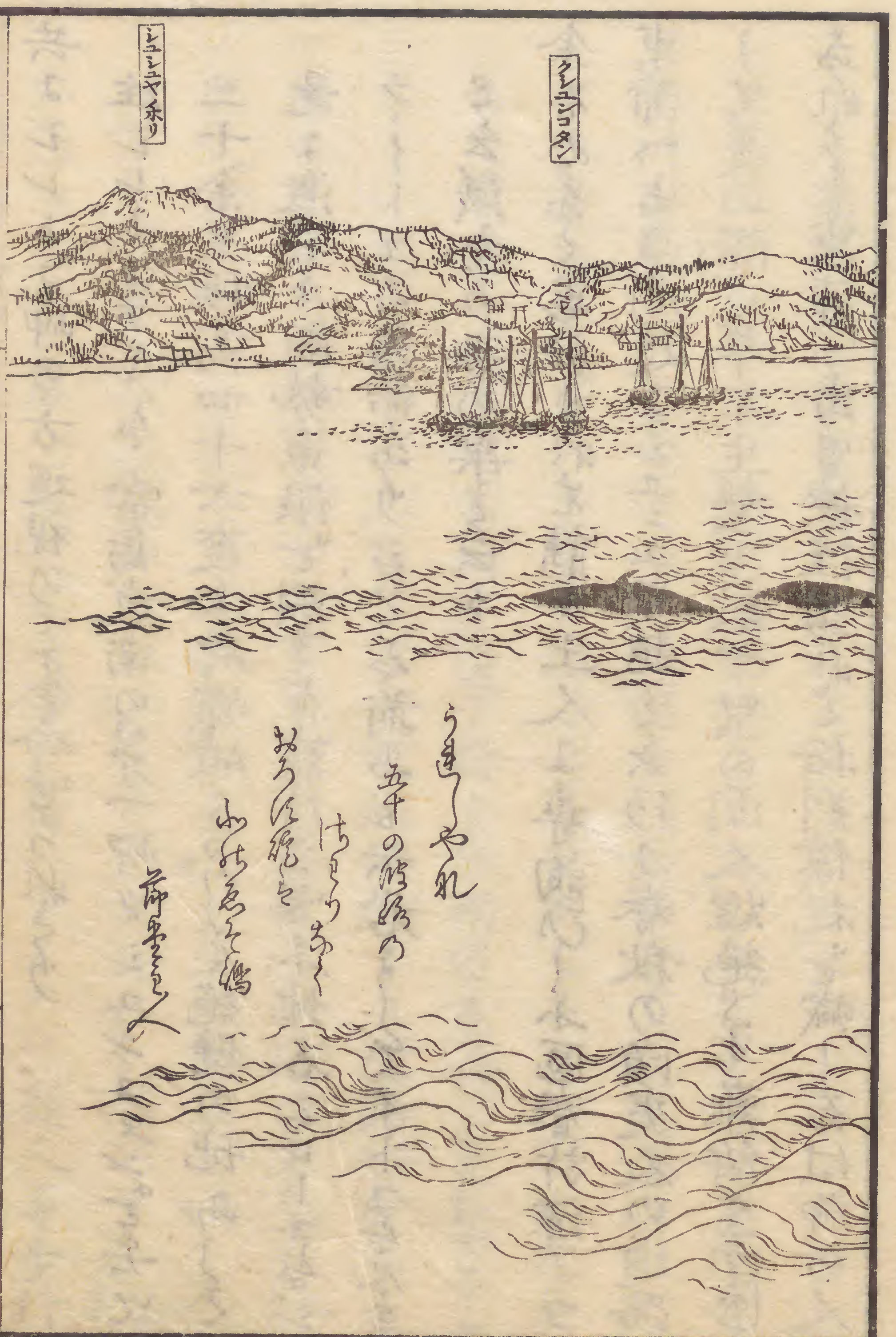
嘉永甲寅六月余(ヨ)堀(ホリ)使君(シクン)に従ひ蝦夷地の西浦を巡視してツウヤ（蝦夷地西海岸にしてカラフトへの渡海場所なり）に風待を同十二日順風にて同所を出帆し唐太島(カラフトシマ)なる志良努之(シラヌシ)へ向て颿しぬ

注志良努之は唐太島の南第一岬西にてノトロの崎のサし西岈なり後ろに山有是に崇て一小湾をなしソウヤを去ること十八里といへり極高凡四十六度余也シラヌシをシラウシの

誤言也シラヽを岩のことなりとウシラヽを尋しと云此地前に一ツ
の礁あるその故は號るゝ會所一棟其外蔵ゝ夷家七軒甲寅
の頃迄ハ山靼人等爰に来りて交易をなせしなり
風西に轉したれば區春許潭（クシユンコタン）へ向て颿らり此夜ハ洋中にて夜
を明し翌
十三日未明より朝嵐に帆をまかせし遣るに其湾中鯨魚潮を
噴上けて其眺めいはんかたなし辰時前同所に着たり
注區春許潭（クシユンコタン）ハ當島第一の好港西人爰を指してアニワ港と
云運上屋元にして建物蔵ゝありて弁天社等美ゝ敷立たり其
北八丁にバッコドマリ南三十余丁にしてポロアンドマリ等

何迄も番屋蔵ゝあり大船何程にても前に滯碇（タイテイ）するに宜（ヨロ）し
此所ハ癸丑の秋魯夷来住せし地なり地名クシユンを浪無（ナミナク）
静（シヅカ）なるを云コタンを所と云儀なり実に好港に依て號けし
とのなり
村垣使君其余僚属も亦皆同日に上峠したり是より先き渡り
越ける人ゝ一同會合して唐太東西巡視の事を謀る兼てハ堀
使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組なりしに粮米人夫なと
差支への事のみ出来て東西手分になり難けれども両使君とも
に西浦より巡視ありへしとなり余ハ國界までも從ひ行つゝ
見へしと兼而思ひ居けれとも兎角差支もありければ水野氏（正太夫）と

トウフツ
ラライトマリ
ホロアントマリ
ヨタ氣志樓主人
圖


クシュンコタン

共ニシレトコ岬の方巡視のことを命せられけり
注シレトコサキとハ當島東南の第一岬クシユンコタンを去て三十余里極高四十六度余嶮巉峨〻として絶壁の地にして是ニ激せる潮勢白浪を淵ませき難所と唱ふ地名シレトコとハシラ、イトコの結語なりシラくとハ前にも云岩にしてイトコとハ尽くることを云儀なり岩の果と云う

余あるなく思ひされた能〻土人ニ尋詢ひしに區春許潭より東浦へ出る間道（アイタ）ニシユンユヤ越と云ありて春秋の頃夷人の通路にて夏の際ハ草木生繁り數十里の間人煙絶る難所なるよしなれとも東浦へ出る捷径なれハ格別僕従を減しなは聊の人

夫ニて通路なるへきよしなり
注クシユンコタンより以北五里計ニしてシユシユヤと云る所有其川上より入て少しの陸を越日程六日にして東海岸ナイブツニ出る是をシユシユヤ越と云なり然るにクシユンコタンを出て東奥ニ到るも當時本道と称るハ南の方廿一チベシヤニと云るに到り是より上なる沼ニ越此沼五リより陸路二リ歩しを過て又沼あり五リ東浦トンナイチヤへ出夫より二リヲチヨボカ三リウエンコタン一リコヌシヘツ一リヲブツサキ一リ半シユマヲコタン五リイスヽシナイ余廿リヲツヱコン十八丁ロレイ二リシユシユウシナイ十六丁シユマヤ一リ半ナヱブツと廻るなりその里程一倍ニ及ふニよりて夷人等歩行

の時ハ此シユシユヤ越の方を通るなり
余竊(ヒソカ)ニ喜び此道を踰(コエ)て国界ニ至んことを堀使君ニ請ひ申せし
ニ使君その意をよみして人夫の煩(ワツラヒ)ニなるさへ覆置もあらは
如何ふりしても此山越をへしと命せられけり然て此日矢口清三郎
直養と余ニわく此間道を踰て国界ニ到らんことを村垣使君へ
建白したり其志晴合しうるも亦奇とて云へしけれは両人同行
して山越あるへきのよしを松前の家来ニ談し支配人清水平
三郎へも談し兎角して人夫粮食の手當を出来られ此行の
志ハ遂ニ決しぬ
十九日今朝ハ朝陰(クモ)り昼の頃より空晴風吹出せり朝四ツ時過

る頃ニ區春(クシユコタン)許潭を發せり
余従一人名ハ壯助直養ニも同一人名ハ佐吉熊打足軽水牧惣太松前家家来番人冨
松豊吉嚮道者區春許潭の乙名イツポング タゴヱの小使サーブ二
アイノ等なり人足ニハヱ子アンベツ、ヱシマウセタボ、シラボク、ヨヲケ
ン、モンキウスムヅナ、ケトチン、ヱルシユトイ、カンコ、女夷ニてヱ
ケラサケンピリケス、ケタフヤ、ヤエランマ、シラヱト、ヲコランヌ、シユ
コシユイケ、上下貳十四人なり此内粮米の減むるニ随ひ中より
追く帰せり
三拾余町ニして雲羅(ウンラ)此所まて送りの人々と袂を分てり此ニ
ハ番屋あり又去年より在留の魯西亜人の畑の試作りせし所

あり三畝歩程も有之蘿蔔(ダイコン)吼吧(ゴショ)芋(イモ)など作りてあり傍に番小屋
の跡あり瓦を製したる跡摸型(カタ)など取散してあり
注ウシラといへるは地形後ろの方櫟(トヾ)立山にして其下に番屋一
棟あり其邊り地味肥沃なる故に會人も畑地を開し又その地
の土をとりて瓦などを焼し跡有なり
夫よりウコカリウシ此所以前は夷家有しが今はなしウシエンナイ
稲荷の社夷家三軒あり五町余にてエントモヲロ同弐軒あり五丁
にてトマリヲンナイ同四軒あり八丁余にてチナイボ此所に清水
平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てシユシユヤ川へ乗
入るべしとて未だ日も晩ざれども一泊したり

注此チナイボの地よりも西向にして向濱ルウタカと對して一
灣をなしその奥シユシユヤ川口にて其沿内拗而海淺し所々に
寄洲ありて干潟なるゆゑ船を容がたし依て此辺りにて満潮
を待て容るなり
此所より平三郎持小屋ありてふとんなく寝食も安からず此処の
前には壱反歩斗の畑有て芦肥(ダイコン)萵苣(チサ)紅蘿蔔(ニンジン)彭翁菜(ゴボウ)などを作り此
芦肥を越年番人第一の食料にて水腫を病さる奇薬のよし
後ろに炭焼の小屋あり是など皆平三郎物て位したるよし從
僕など前濱にて鰈の四五寸斗なるを取来りて食せり鰈夷語にてカ
バレイと云此夜は心よく寝臥せり

此辺
シユシユヤホリ
と云高山あり
此辺ムイホリと
云山あり
此辺
タコイホリ
と云山あり
此辺平山
椴木立
原なり
東
此辺椴木立
原なり

南
西
北
此辺皆椴木立原なり
野地多し
シユシユヤ越山道の圖
多氣志郎製

注當所より奥シユシユヤ辺に産する鮏の味美なること又ことに多く産すること他に類なし冬日には此湾中一面に氷結る也土の辺りの土人其氷上に大篝火を焚し穴を穿其火温の氣に集り来る魚を拮搶にて突取る羽の八龍湖にて氷を割て網を投し漁するよりも甚興一倍せりとの事又其肉味も龍湖に比すれば殊に美なりといへり

廿日朝曇りたれども雨の氣色とも見えず今朝潮の満るよしにて昨夜より吏船を前浜に廻したれば未明より支度して乗船せり然るに此行は嶮悪の山路を越ることなれは尋常の旅装にては迚も通行成難きよしなれは吏人の衣服アツシと云物を着し尾花帽子と云ものを冠りキナホスと云へる脚半を附たり

因て一絶を得たり

欲執狐筇窮嶮奇風餐雨臥亦何辭樹皮短褐芒花帽也好人呼為島夷

注此間道は道形もなき処を元の目的と山流水脈等に取て丈よりも高き草の中を分ちて谷地中なるを行ことなれば故に終日下体には露深されども此装て行ことなれば其アツシといへるは木皮(ヲヒヤウの木)にて織たるものにて是にさまさまの繍紋ある拵のものを木綿にて縫縷せし土人の常服(ヲハナホウシ)尾花帽子といへるは芒花の穂にて作りしものなるが多くは羽の最上辺よりも出又

キナホスといへるハ奥羽にて蒲脚半（カマバキ）といふて寒地ハ木綿にてハ
雪の中凍合してあゆミ悪く又草深き所を越るにハ一日も不
保ゆ故に多く此蒲にて作りしを用ゆ是ハ南部領の沼宮内
辺より出る其上品なるハ馬の尾を以て作る雪中越る山中に
ハ甚よろしきものなり
凡半里程乗出したる頃より空の氣色俄にかはりて雨降り出しより
ツナイホ（地名）よりハ三丁余にてシユシユヤ（地名）夷家八軒あり三拾丁
余にてシユシユヤ川口なり入口氷深壱丈五六尺余川口午の正
中に当れり
注シユシユヤなる其地形後ろの方に鳳尾（トド）松の黒く繁茂せる

山續きシユシユヤノホリといへる岩續て前ハ少しの岬をなす其
辺り蒲柳（ヤナキ）原にして氷際にハ蘆荻多し其中に家居せし所なる
此湾の第一奥の東岸にして波浪少しもなしシユシユハ柳の
夷言にてその多きによりて号せしにや是より土人等歩行の為
ハ川口の手前字メナシサシといへるにて海を歩行にさとりし
夫より山にへて字チタアエにあるよしなりに船にて行にハ一里を
沖を乗りて此川をさして棹さし入る此川口ハ湾中第一の奥の
方にて洪水の節押出せし土砂多く処々に附洲をなして船
動も乗りとそ難渋せる所なり
川に沿りて四五丁程の左の方椴林の内に鷲の雛の梢より落

たゞその驚て飛廻るを見附られ番人豊吉船より飛下り續いて
夷人共走り廻り終に手捕にしたり是を両使君へ献ぜんとて
水野氏へ書を添て帰り船の便に寄したり此辺鴨の子雀の如
くあまたの方群て水上を行さま珍らし川口より半道ほど
にて枝川へ入爰より船を棄て上陸せり此所字チタへ（地名）と云由
木挽小屋あり雨ふり頻に強く降出しされど此處の小屋に一泊せん
と識ども去りとても無て山越の日を積りて食粮を携へられば
何程の嶮悪なりとも雨に障へられて滞留なりがたりまでは志を
遂べくもあらねて兎を角もして前路にすゝまんと決定しけく
歩を進めぬ

和人ら白米夷人ら玄米にて凡十日程の食糧を貢載しその
余ハ船にてトンナイチヤよりナエブツの方へ廻して積りにて船廻
しの今も引續いて出したるよしなれども風潮に障へられし
みや東浦を回る内終に此船来らざりし
注此船廻しの事ハ前にいひたるごとくチベシヤニより沼越トン
ナイチヤへ引出し東海岸をナエフツへ搬送りし行事なり
此辺り両岸とも椴蝦夷松のたぐひの林にして女蘿数丈のもの木ごとの
無りて地に垂てあまた内地にて絶て見ざる唐画の山水のごとく
また一絶を賦して其木の皮を削りて書し置
松掛女蘿千尺長素絲翠蓋滿山香平生飽翫唯圖畫始識

人間有此疆

此道樹枝交加して眼に遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を著かゝ雲叉なく雨ハ降ども降り困苦いふばかりなし辛うして二里ほどもすゝみて少し小高き所に上り弁当をきひらかんと爰をメ、（地名）と云小流ありて水清冷蚊の多きことハ言語に絶たり火を焚ハ少しハ蚊にはなれり夫より壱里半程にて字アヲイ（地名）と云此所少し小高深林の中へ小屋掛したり小屋掛をなせる所ハ水の宜しき所を撰ミ又小高き湿地なくさる所を見立るなり悪き所ハ腹痛の患あり湿地に臥る時ハ瘴氣に打まて病を得且虫の妖多くして雑義するなり扨小屋掛をなせる所ハ立木より立木へ枯木の丸太をわたし是にて屋根組をなし其上を椴の木の皮にて葺なり夷人ともに専馴たる道ハ携へる鉞にてその皮を剥するにて手早きことおどろくばかり

注此山道中誰にても通行の時小屋を架るや必す椴の立木の皮を上下長四尺斗に鉞目を入置て剥き是にて葺く纔三四人の宿する小屋家根とへども其皮凡貳十枚三十枚を用ゆ其皮を剥木ハ必す一枚ならで剥ことなし其剥取し木ハ枯朽ることなり依て其時に小屋掛したると云所にての跡を余通行の時節見るに凡一ヶ所毎に百本余ついで立枯たり是等の事にても此地樹木の多きことを知るべし

小屋の前にハ枯木を集めて終夜火を焚たり急卒に掛たる小屋なれハ雨降出しゝかハ漏りて堪かたく夜半にハ油紙なと引掛て兎角して夜を明しぬ

廿一日昨夜より雨降り續きたり五ツ時頃にアヲイ（地名）を出て半丁程にてアヲイ川に出る此川水清冷なりし渡りて嶮き坂を上り山道前日の如き椴松の中を凡壱里程にてコイ（地名）と云地に至り深草の中に小屋掛あり是に入て朝飯の握り飯を食ふ

注此地一ツの沼あり其沼周り凡壱里半是より落るをコイヘツと云水清冷なるにより川に出人為通行の節多ハ此所にて宿をとり余る通行の時も此處に小屋あるよしなれとも度にて

来ることを得たりしとサツコイと云るにて露宿しぬシユシユヤなと云き是まて雲路なりしは早着なれとも夏道ハ中々着きて難し

番人窩松樹皮を剥て此所を始て通行せしものを記し其に續て予より同く余乃其末に漫書したり

草露鞭來山露新　手排茅塞分荊榛　風流官吏過斯地　開闢以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎杖（イタトリ）に似て東言ハツハシと云ものと款冬（つき）東言をコロクニと云ふ二圍余なるもの路を塞き先へ進むも人ハ見えさる計りにて其上泥濘にて深き所ハ膝を没も壱里程にして小川なり

渡り深艸を分行くに向ひ来るものありて東浦ヲタサンといふ所よりクシユンコタン勤番の松前家士へ同僚よりおくる書状の飛脚なり此夷人の話に先立の間宮氏へ積贈る米船をヲタサン洋にて傾覆し其米を失ひたり故に来る飛脚なりと此米を我か粮に関係すれは各是よりして心を傷めさりき爰にて飛脚に別れ昼食して歩を前めたる路は猶も悪くさなきての草繁茂し水葵のごとくにして葉の大きなるものありて犢舌(ベユノシタ)と云款冬いよし多くしてはよし大なりき

款冬如竹欝叢生　葉々相重翠影清
山路不妨多雨露　一莖代傘蔽頭行

注世間欵冬の大なるものを秋田欵冬(ブキ)と号て好事の人其葉を
摺て大さ藤紙に半しく風騒家等是を傘にし比を此地の物
ハ是に倍して若藤紙に摺る時ハ全紙に満へく是とともに
比せて馬楽合羽とも云なるへし
晝休せし所より弐里余にしてライ(地名)と云る茂林に小憩を此辺立
木の中程を凡にして抓きたるやうなる跡あり依て是を土人に
問ふに羆熊の雪中途に迷ひたるときなしなりと又是より壱里余
行てハーセ(地名)と云所に夷人ともの通行の為に掛置たる小屋有
止宿す
注此所をハーセと誌されしハ實ハ此処ハアセクシとよへる地

なりハーセなる此所より行て先生歎きましし川をハンケナイと
よへるか其川の向なるへし去而此辺の土人往来ともなり此所の
川の此方か彼方に是非宿するよしなりとて余も此川の
向ふにて宿しぬ
此小屋ハ左右に雨覆ありて中にして火を焚なり今宵直養余に
云糧食給せ汝ハ志を遂為にか汝目を併せて進まんとすれども
女子(ヲノコ)の人夫を操りたまふは意に任せ汝従く其先に進んで糧
食の手當をなすへし行李ハ跡より搬運せんなりを余に托せ
とありけれは其意に任せて余ハ一日路を後遅てまかんと議ぬ
許余まて直養に謝返せしを然るに此所に續き了りて其意気を

感し指手して一笑せり此深叢中数日の難程猛獣の臥居ること
ちく恐るべき地なるに直養強て前をとらず其意敢て糧食
の為のことにハあらざる故へし此辺り足ハ泥濘に没し両部ハ如何
やうに装ふも忙懐の為に責らるゝ同行の為にも敢て進
て路むの敢てなき時ハ如何ともなし難し余もクシユンコタン詰
武人と同行のよし隊長より言聞されしことも武人の遅足を案し
前行を私一日前に只土人のことを召連て出立したるに按に遠
からず武士ハ遅足にて種々の奇語も成りし他日土人
共より聞伝へしも耶のし
此夜ハ夷人共の掛ける小屋なれハ床とてものもなく坂殊なし

多くして紙帳の破れより入瘴氣肌を侵して眠につき兼たり
き
廿二日朝の間ハ曇り昼後より晴たり直養ハ朝疾く起き従僕
土人番人冨松并に郷導者イツポンク其外人夫五人を引連粮
米其外必用のものを持せて余より先に発せり余ハ少し後れ
て出立り山道廿町余を過てバーセベツ水清く浅し後く此
川にて暫休す
注先生此川バーセに有よりてバーセベツと志るされしも
此山中バーセベツと云ものなし土人此川を指してペン
ケナイとも云又ハペンケナとも云又トナイとも則ち

此所ハ上の沢と云儀ゟ余ハ此川の上りにて宿しぬ
又拾四五丁にして同し川の上に出るサアブニアイノ余を背負
て渡せり夫より一里斗りにて字イナヲカルシと云る処より
出り此所ハ木幣多く立て山霊を祭れり
注此所本名チハホイナヲカルウシと云なるへし柳の大木ある
其傍に往来の土人削花(エナヲ)を建て拝をなし行ことなりとそ其謂ハ
昔此島に鍋の無りしに此タコイに住る焼てふ土を以て始て
鍋を作り東浦の土人へも製を教へ夫よりして南浜より西
浦の土人にも教へんと鍋を背負此所まて越来りて風を過
て倒れたりとまゝより意の達せさるを患ひて此処にて病に

係り終に死せしと云り其跡を今神に祭り置き此辺りの土
人往来の時として削花(エナヲ)を手向て数日の途中の食粮を饒さ
正越さんことを祈り誓ふとそのやか此其土鍋を此島にて用ひ
しはしめて昔々の赤本語しの類に思ひ居らしに今度丁巳
春堀君西浦の砌にクシユンナイにて右に図せし如き鍋
を壱枚土中より堀出せしとて同所の土人献せしにより
持帰りたまひしとそ余も始て土鍋を見ひし昔語り
を信しぬ
又壱里余にしてシユシユヤの川上に出る此処をヲロコトイーと云
此辺りぬかり道ハ水たまりなれとも草生茂りて深く歎息のよく

太くまがく坂の多きゆへ言語に絶せり夫より同じ様なる深叢
中を分て壱里半程行てまたミユミユヤ川の端に出る
注此地ハ字ベンケヲロコトイと云なるべし始めにおし川端を
ハンケヲロコトイと云下のヲロコトイと云儀なり此辺り歟
冬扉なるゆゑ余爰に肉蓯蓉を数十茎掘らせりクシユンコタン
の小使ツクニウと云ふハ頻り物を食へ居る者なるの故に是を
とらせ何ならものを志ら次第にして百連なるロレイの土人ア
カラカイ（人名）なるハ是ハ夷言エバーと云て東海岸の土人ハ
撲傷（ウチミ）折傷（クレキ）金創（キリキズ）等に是を搗砕きて附るに甚効験著しと
依て考るに是ハ南濱よりも西に無して東海岸に多きと覚也

その形像日光山志また本草図譜等に出されハ略しぬ
土人等夫婦此所に小屋を作り居たり名をスグロクと云女子(メノコ)を
むトヒンと云其傍に小川あり字モツケイと云よし其土人等ハ
何の為に来り住けるや聞に鱒の漁をなし又食料に用ゆるアンラ
コロといへる草の根をほりに来り居るとなり依て召連る土
人等に直に煮て振舞たり

注アンランコロハ東西蝦夷地すべての名にして此地是をハーと
云則黒巻丹(クロユリ)のことなり上除ニヨカイーと云ものあり是車巻丹(クルマユリ)
のことなりまたトマと云て延胡索(エンゴサク)の根を食用とす延胡索
ハ薬名にして通名ハヒツチリと云漢名を滴金卵と云生図

本草図譜に出されハ略し次にハー・ニヨカイーの二種を出し置
ものなり
夫より小流を渉り何迄も独木橋ありて半里程にてまた深林
の中に夷人の掛る小屋あり此所をエクルケ(地名)と云此林を出て
広き原に出たり蝦夷松の緑深くして草の丈ケ高からす向き
総(フサ)揚枝柏のかき草多くして景色宜き地なり

注按るに是等ハあしく菌蕈(キノコ)の一種なり雑木盤蔓し枝
葉落て腐(クサ)り喬木(ヨハキ)倒れて朽(クチ)たるの地也と梅雨の比
かゝるものを生せて余も此辺りにて数十種のものを見ぬ
イナウシ(地名)と云此原野を斜く過て又山道にへり弐里余にして

深林の中小高き所に小屋掛して夜を明せり今宵ハ直蓑を枕
らにいとゝわびしかりけれと

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜
同牀唯草蟲

又

斜架危擔了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨禿筆
題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫
長松上獨寂幽奇就睡遲

注ユナウシをエナヲウシの偕語なり此地東西の境目にして分
水の地なり依て往来の土人東より来るものハ削花(エナヲ)を作りて

東の方の山靈に暇乞し西より来る者ハ西の神に暇乞して途
中の安全を祈る事なり依て多く此所に立よる故に踊る[redacted]ウニキ
多しといふ儀なりとぞ
廿三日朝曇り五ツ時小屋を出て山林を暫く行ニヨロマトウ地名と
いふ沼の端に出て夫より廣き野地なり此地萱艸(カンゾウ)咲乱れ且閑
に渓蓀(アヤメ)多く咲交り花なる地にして四方打開け少しハ鬱氣を散し
たり沛迄るに坂の多き所の糠を振落しの如し宜しき絶と浪り
卯し夫より又落葉枝多く生繁りたる中を分け行に前行の
人ハ少しも見えぬ其落葉の大きさ根の所にて八九尺七八寸も
廻るへし壱里余にて子モイ地名といへる處へ出る此所川あり巾弐

間斗夫より山道又野地を過てタコエ地名の川上カモイチウといへる所
にて昼飯をしたゝめ深叢の中に箬(クマザサ)生茂りたるを分てケナシ地名へ
到る又此所にも小川あり其傍に夷小屋壱軒あれとも人ハ住まし又
同し処四五丁はかり巾四五間の川に大なる柳の樹の倒れてあるを自ら
橋となして処あり枝ハ半天によこたはり出て深翠蔽ひへしむ斉く
是を越て野地山林を過てホクイチヤン地名といへる所にて休息せり
源頼光峯入の畫巻物にて彼大江山にて童子か岩窟の
まへに大なる溪河へと枯木を倒して越るさまありしか先生
おそろしき其心持にて越しかひしならんと咲ふにまかり
て竊笑しぬ

夫より又拾丁余にてフルシチヤン（地名）漁小屋弐軒ありて又拾四五丁
行てトノシチヤン（地名）此辺に夷家壱軒ありて七歳斗と四十歳斗の
小児弐人並居たり此夷家は我に付来りたる人足ポンキツ（人名）夫妻
の家なり妻をシユコシイケ（人名）といひ家には老人弐人ありしと云此
小児をポンキツが子なりと思ひしにポンキツが孫子を養ひ残し
置クシユンコタン（地名）へ夫婦にて稼に行て居たるの此夷の人足に
雇はれたるなり今日は己か家に立寄るよしにて止宿して
某等と違ひ此処より少し同し道を行こと凡三千丁余にし
て嚮導サアブニアイノ（人名）の家に着せりサアブニは当時家内九
人暮しのよしなれど春斗りは皆ゝ汲寄合世帯のよし

小屋は四間に三間半もありぬへし梁を二ツ切てあり其一段高き
所にキナ（蒲の）むしろを敷て余か坐を設けたり余サアブニに宝物を
見せよといひしかはやかて一本の棒（ハシコ）を持出て棚に上り延かけの中から
赤錆（サビ）の太刀の身と其鞘を出しけり然るに其刀ハ錆たる故
にや鞘に入らす又其外に銀箔を貼したる菖蒲刀の身柄の板
のことき作りしを見せたり余ピリカくと賞しけれハサアフニも其
賞せしを何思ひしや喜ひたり次にまたカマスの内より女の古
着を出して見せたり是ハ彼か晴れ着の生（ナマカヘ）模様にて縫模様
の紋所なり是を折り包みたるハ最も唯かまけて次の内に押入
たるは様々雛を入れたると論すなし今宵ハ山中と違ひ安心して

らる卽ぬ
注此処平地にて東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
ロマイの方へ落る川と合して是より五里斗を下りナイ
ブツ川にて落合なり人家九軒ありてサアブニと云此所
の小使役たる者の敵き家も損應に大くして余も此家にて
止宿せしなり此時寳を乞しかはやゝありて一本様にて
棚の上へ乗り起かまへてとりおろし此中より古着を敍り
大きき刀の身を年と鞘とを出して見せけるに此身広く
志て子母楯子巳の紋をこき程彫をり其鞘ハ出人ら見る
の細工なるやも様にて処々を巻玉極雅味ありし

袁類なるべきことの外に扱ひ侍の拴をみんとて文字拓のごとの
有る故に是を問ひしに矢ロニシハのカンヒと答しかば見れども
如何にも手垢つきて黒くなり終に讀むことを得ざりしも
遺恨なりける
按るに余是まで何処にもせよ落書すること無しとありて生来に
麻伺あるを徒らに事と慰むの情なく依て余は落書は云
に及ばず況や米に麻伺するは為のわざしき此度の行処は山
中にて紙目等をみんて吏を目的とし心丈夫になりしより有
ことの外は我も体こし所は兇も何ぞにも志なし 首なきしこれ
と思ひ侍りしに夫人を使ひても其人を任に当れば徹用を

なりし当さる処へ見ひなば如何成英雄豪傑俊たりとて
も驚馬に乗る事なし落書紙目も当社の捏造の白髪採
は無用なりとの事とより編みし かくる山中にて見る所に
一路の直も一金として費を為すか
廿四日晴より サーブニの宅を出て河の川を渉りて中々
深茅の内へ分へ入り数冬その余のことの是まで生茂り
て惡道いはんかたなし トウシトウ(地名)の脈を通り山に上り野
地を通りて小川に出てウロウーと云所にて爰にて島雀の鳥
に逢ひ進さるを捕へし深叢の内へ殺ちやりそれより艸の
中を来りてシアンチヤ(地名)と云に出 此所夷家二軒 エフンハ(人名)と

国立公文書館 National Archives of Japan

云ふもの家に休む此家ハ直養を休とし由ありし此小家のあ
ま搬夷舩を備へたり依て是に乗りる川巾弐拾間余も有
廻し是タコヱの川下ありて両岸垂柳にて屈曲し拾一丁余
にてオシ子ナイ（地名）と云川に落合是より幅廣くなりたり
往此処余ヶ通りしに些し異り余らタコイより山道を
里半計りゆきくヘン子カルウシ（地名）と云ふに出すして壱里余も
下り此シアンチヤのヱフレハの家にて休む夫より廿丁余に
ちくナヱブツへ下る有り此ナイフツ川ハ西北より落來りて
此川の本川なり是より上に人家弐子村もあるよし此
是より河巾七八拾間にも及び一里余ある四五等より六等

位ふるも及ぶ當島トツリ以南の第一の巨川にて水豹も
多かりし
キヽニウシ（地名）アフコタン（地名）ビラボ（地名）なとを過て三里程にてホロヌウ
川岸に若く美なる此所に女夷壱人佇居て声を掛より搬
夷舩弐艘来りて余か舟中のサーブ（名）二人と物語りてやがて
乗来る船と変りて乗替たり此辺より雨頻りに降出し
寒さに堪さりし其形状を察しけるや女夷薪の燃さしを持
来り火鉢程の物なれを壱尺程も有へき板に置きたりく
手を煖めけり程なく薪ハ尽たるも板にも火燃へて煖かなり
此辺左右の水上に水豹湧く首を出して船を窺ふもまた川

岸に兎の居るを見たりサーブニに問へハ是をヲリケヱ（兎の夷言）と
いへり夫より壱里余にしてナヱブツの岸に上り青艸中を
行き夷家に着きし通辞の豊吉ハ跡船にて後れたり暮て
粮米の事心にかゝれハ余輩か覚へたる夷語をもて聞く運上屋
チツフ（船）アマ（米）、アンナ（有）と問しに夷人等首をふりてイシヤム（無）くと
いふ爰にて大に望を失ひ如何ハせんと案し煩ひける雨ハ
ますく強く寒さん堪かたけれハ爐に焚火をしく身を煖め
濡たる衣類を乾しなから待つ間に跡船も着て夷語を通し
直養ハ書たる書状を取出して漸く事情も分りたり先き
直養ハ心構へに賂ひし弐苞の米ハ先達の間宮か持行たる

余輩らの為にクシユンコタンより送らるへき米ハ未た着せすして先立の
為に跡より賂ふ米船ハ昨日此地を過てオタサレ（地名）と云所まて
行過たりしなれとも此船を引留て粮食の手当になすへし
とて直養ハオタサン（地名）をさして走り行しか返よしなりかゝ
故に我等ハ同行の粮食ハ如何ならんと未た十方に暮たり

評先生十方に暮られしも目睫に見るの如し

今宵米ハ漸く八斗ありし玄米を亦継なりしなれも豊吉か覚
えし是より弐里斗りも南なるシユシユウシナイと云所より玄米
壱斗入加へ出て取寄たり是まて皆く力を尽して此夜より玄米
を食となすへしと議して齋したる饘粥をこしらへ喫して

才郎より其家の主人の名をワーチヤアイノと云ふよし
注此処ハ東海岸にて萬里の波濤目にさへぎるものなく此河ハ
壮地第一の大流沢目数十里開けて源をルウタカノホリより
来り其川口の南岸に家居してナイブツと云沢の入口と云ふ儀
に熱帯水脈塩氣を含みて悪し弐拾町も上り壮岸一の
の沼あり凡廻り弐里もあり其辺り皆椴木立茶海岸に六
五鬚松の長さ丈より弐丈径の土の林をなしたり秋より末
此辺り鶴雁其外さまざまの水禽多くして所謂其の喋りし
き声ハ家の内にて對坐し物語りするも声を妨げらるゝ迄
て聞とり難きほどなりとかや

甲寅 唐太日記巻の上

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan